

幕末期中部地方の地域情報 ——平田門国学者を中心として——

高 木 俊 輔

1 はじめに

このプロジェクトの主題である「歴史と文学」の取り上げ方には、さまざまな形がありうるであろう。筆者は、歴史的素材に「密着」して叙述された、いわゆる歴史小説を取り上げたいと思うが、ここでは歴史小説論を直接に扱うのではなく、一つの歴史小説が描いた世界を、歴史研究の一環として位置づけておくことを試みたい。つまり歴史小説が描こうとした世界を、当時の歴史的背景や歴史的状況から客観的に把握することによって、作品理解を深めたいのである。具体的には、近代日本の作家島崎藤村が書いた『夜明け前』の歴史的背景を取り上げることにはしたい。

筆者は、すでに『夜明け前』の重要な素材となった「大黒屋日記」の日記としての性格について、いくつか検討を行ってきた。「大黒屋日記」は、馬籠島崎家の隣家大脇家の当主兵右衛門信興が書き残した「年内諸事日記帳」のことである。この日記の存在を知ってから、藤村は父の時代を小説として描く決意をし、この日記から大部のメモを取り、大脇家の屋号をとって「大黒屋日記抄」と名付けた。このことから、「年内諸事日記帳」は、通称で「大黒屋日記」と呼ばれるようになったことは、よく知られている。この「大黒屋日記」を検討してきたのは、この日記自体がいかなる特徴をもった日記であるかを追求することによって、藤村が日記史料をどのように小説化・作品化したか、その問題点を解明できるのではないかと、との

判断をもったからである。

「大黒屋日記」に関する筆者の検討は、まず「大黒屋日記」原文を解読し、パソコンに入力してその全文テキストを作成し、キーワード検索による記事の抽出を重ねた上で行った。その結果の一部をまとめた①「農民日記史料論⁽¹⁾」では、島崎藤村自身の「年内諸事日記帳」との出会いと「抄記」作成の過程、ならびに幕末維新期の庶民日記史料の概観を行った。②「農民日記史料論(二)⁽²⁾」では、「大黒屋日記」(「年内諸事日記帳」)の全文テキストから、地名・人名検索の結果の一部をまとめた。また、パソコンを利用した全文テキスト検索の入り口に立ったところであったため、検索の進め方なども示しつつ地名・人名の概観をしたに留まっているが、この日記の地名・人名の全体的傾向性は析出してきた。③「幕末維新时期農民日記にみる地域情報⁽³⁾」では、人名のうち、馬籠・中津川のめばしい家ごとに検索記事の集約の試みを行った。馬籠では藤村の生まれた島崎家、中津川では問屋・村役・平田門国学者の間家・馬島家・市岡家・肥田家を取り上げ、「年内諸事日記帳」に書き込まれた各家の記事の集約作業を通じて、日記史料のもつ地域情報の豊かさが、長編小説の背景にあったことを示した。

さて本稿では、『夜明け前』に書き込まれた歴史的世界を、いったん「大黒屋日記」から離れて検討しておくことにしたい。つまり「大黒屋日記」や小説『夜明け前』の歴史的背景を、よりひろく把握しておきたいのである。それを、①幕末維新期の平田門国学の普及状況概要、②めばしい国学

者の門人紹介活動の展開過程、③地域国学者間の情報往来・情報伝達の実際、などに分けて、とくに近江・美濃・三河・信濃を中心とした検討をしておくことにしたい。

2 幕末維新时期の平田派門人層の形成

(1) 平田門国学入門者概要

本論文の対象地域である中部地方にかぎった平田篤胤生前・没後両方の門人は、集計して示すと第1表のごとくなる。『夜明け前』の世界と関係する地域として、信濃・美濃・尾張・飛騨・三河、それに内陸部で接する大和・近江の7か国を検討対象として取り上げた。門人の合計は、信濃629人、美濃366人、三河93人、尾張53人、飛騨2人、それに近江188人、大和74人であった。なお、門人数については、当面は平田家の「誓詞帳」（東京、平田家蔵）に拠った⁽⁴⁾。活字化された門人帳には「門人姓名録（気吹舎門人帳）」（東京、無窮会図書館神習文庫所蔵）もあるが、ここでの集計は、『誓詞帳』に限定して行っておきたい。

まず、この7か国の入門時期の傾向を見ておこう。飛騨の場合は、入門は慶応4年閏4月と同年11月の2人のみであるから、実質6ヶ国の検討になるが、総計千四百をこえる入門者は、第1表のごとく、ほとんどが1860年代であったことが分かる。文久年間から年平均20人を越え、慶応期になると60人から100人をこえるにいたり、ピークの慶応4年（明治元年）は441人、その後明治2年は291人、明治3年135人、明治4年95人というように減少し、これ以後はほとんど入門者はいなくなる。維新直後の国策で国学が重用された時期に、とくに信濃・美濃そして近江・大和の順に入門者が多かった。

周知の如く、信濃の門人数は620人をこえて突出して多い。その信濃の門人数は、開港までの間はきわめて限られたものだった。それが文久期に

増えはじめ、入門者が圧倒的に多くなるのは慶応期で、しかも慶応4年（明治元）が208人、明治2年が178人と全体の6割、慶応期から明治2年までで8割をこえている。そこには、平田社中ともいえる門人集団が生まれ、その形成を推進する地域で核となる人物が存在したのである。信濃で最初に平田学普及に火をつけた岩崎長世、足利三代木像梟首事件に関与して京都を逐われた角田忠行、伊那谷平田学の中心人物の北原稲雄・片桐春一・倉沢義随らがいた。彼等の紹介活動については、次節においてふれる。

美濃は、人数からいえば藩中をはじめとする苗木が60人と多く、次いで商人を中心とする中津川が36人、また隣接する大井・落合地区を合わせると恵那郡の門人数は150人をこえている。美濃では加納藩・高須藩・久々利藩などに門人グループがあり、加茂郡も越原村・神土村などに門人が集中していて、郡単位でみると115人を数える。美濃国の場合、それぞれの地域に門人紹介を積極的に進めた人物がいた。苗木では青山景通がおり、苗木で慶応4年8月に青山の紹介で入門した林久世が、後に苗木で5人、加茂郡越原村で27人、その他神土村など加茂郡で31人、計63人を紹介して入門させている。なお恵那郡中津川では、馬島靖庵・間半兵衛（秀矩）・市岡殷政など、落合には鈴木茂門がおり、加茂郡では林久世と安江正朝がいた。

三河は、まず吉田が藩士をはじめその他を合わせると35人をこえている。次いで宝飯郡21人、八名郡13人と続いているが、そのほとんどは渥美郡羽田村の神主羽田野常陸（敬雄）の紹介によるものであった。文政10年（1827）入門の羽田野は、文政13年から紹介活動に入り、渥美郡の約半数、宝飯・八名郡のほとんどの入門を世話している。三河の国内で40人以上、遠江など他国を合わせると60人をこえる紹介を行い、文字通り三河地方平田派の中心人物となった。羽田野の影響を受けた

第1表 平田門国学入門者数表

西暦	日本年	信濃	美濃	三河	尾張	飛騨	近江	大和	計
1813	文化10			1					1
1814	文化11	2							2
1815	文化12						1		1
1816	文化13		1						1
1817	文化14								0
1818	文化15								0
1819	文政 2								0
1820	文政 3						1		1
1821	文政 4								0
1822	文政 5				1				1
1823	文政 6								0
1824	文政 7								0
1825	文政 8								0
1826	文政 9								0
1827	文政10			3	2		1		6
1828	文政11						1		1
1829	文政12			1					1
1830	文政13			1					1
1831	天保 2			4				1	5
1832	天保 3			3					3
1833	天保 4	1		1					2
1834	天保 5			5					5
1835	天保 6			1					1
1836	天保 7						1		1
1837	天保 8								0
1838	天保 9			1					1
1839	天保10								0
1840	天保11								0
1841	天保12								0
1842	天保13			2					2
1843	天保14								0
1844	天保15			1			1		2
1845	弘化 2								0
1846	弘化 3								0
1847	弘化 4						1		1
1848	弘化 5								0
1849	嘉永 2	1	2						3
1850	嘉永 3								0
1851	嘉永 4		1						1
1852	嘉永 5		1						1
1853	嘉永 6							1	1
1854	嘉永 7	1							1
1855	安政 2	1							1
1856	安政 3				1				1
1857	安政 4	1					2		3
1858	安政 5	1	1				2		4
1859	安政 6	7	2		1				10
1860	安政 7	6							6
1861	万延 2	10			4		10		24
1862	文久 2	9	1				6		16
1863	文久 3	19	20	4	1		1		45
1864	文久 4	8	7	6	1		4		26
1865	元治 2	34	12	2	5		4	2	59
1866	慶応 2	53	13	7	4		3	1	81
1867	慶応 3	43	12	8	5		35		103
1868	慶応 4	208	93	21	15	2	51	51	441
1869	明治 2	178	65	11	6		21	10	291
1870	明治 3	35	65	1	3		24	7	135
1871	明治 4	8	71	3	3		8	2	95
1872	明治 5			1					1
1873	明治 6	2			1				3
1874	明治 7	1					1		2
1875	明治 8		1	3			8		12
	計	629	366	93	53	2	188	74	1405

門人には、三河で草鹿砥肥前守・竹尾東一郎、松平大炊守（杉浦大学）らがいる。

尾張は、美濃・三河に較べて門人は50人台で比較的少なく、名古屋藩士がほぼ半数を占めている。慶応3年以降に島田正胤が5人、宇佐見則正が5人を紹介しているのが最多である。郡部では、安政6年に入門した小関宣胤が4郡にわたり8人を紹介している。尾張では1～3人の紹介例が多く、特定の社中の形成は行われなかったようである。

近江は、蒲生郡が55人、犬上郡が37人、神崎郡が23人で、近江全体では約190人である。蒲生郡では八幡が19人、日牟礼が8人と多く、犬上郡の平田門では彦根藩が16人を数える。これは慶応3年から藩士間にひろがったもので、紹介者は慶応2年に入門した西村久岑（久岑の紹介者は西川吉輔）であった。近江八幡の商家出身の西川吉輔は弘化4年（1847）の入門であるが、安政期から平田没後門への紹介活動をはじめ、西川の名前で紹介した人物は近江だけで110人をこえ、西村久岑など西川の紹介を受けて入門した者が、さらに紹介をしていくという広がりを見せている。西村久岑は36人を紹介しており、その他の近江の入門者をみてもほとんどが西川吉輔とつながっていた。西川社中ともいうべき動きについては後述する。なお、近江では、明治8年に旧越後村上藩出身で滋賀県の士族となっていた小嶋平五郎盛可が、滋賀郡阪本村の農民で日吉神社の祢宜以下9人を紹介して入門させているのが目立つ。

大和は、際立つのは添上郡奈良の春日神社祢宜たちの集団的入門である。慶応4年4月が17人、5月が3人、8月が4人などで、明治元年の合計は30人をこえる。その前半の紹介者は各地で活動をしてきた岩崎長世であり、6月以降は伊豫国出身の神主菅長義の紹介によるものであった。岩崎長世については、後節でふれることにしたい。その他の大和の門人には神主が多いが、添下郡郡山では藩士と城下で10人の入門者があった。

（2）平田門の門人紹介活動

ここでは、多数の門人を抱えるようになる平田門について、めばしい紹介者の動向からその組織的な特徴をみていくことにしたい。幕末維新期の文化オルグによる文化集団形成過程の一端を解明する糸口になるのではないかという意味をこめて、具体的な門人紹介の動きを追っていくことにしたい⁽⁵⁾。

信濃の平田門とくに伊那地方の門人については、『夜明け前』で多くが語られている。そこで、まず信濃から検討していきたい。信濃で最初の平田門の入門者は、江戸日本橋に居住していた信州人であった。信濃在住者で最初の入門は、天保4年（1833）諏訪郡高島の小山丹宮と松沢四郎右衛門（義章）の二人で、平田篤胤生前は以上の四人が信濃門人のすべてであった。松沢は諏訪高島の人で、江戸と信濃を往来して小間物の行商をしながら勉学に努め、国学を愛しその普及に努めたとされている。しかし、平田家の「誓詞帳」には名が洩れているし⁽⁶⁾、自らは息子一人を除いて紹介の手続きはしなかった。その子松沢四郎兵衛（義任）は、安政6年9月に入門し、慶応元年から紹介をはじめ、明治2年2月までの間に18人を紹介・入門させた。松沢家は、妻・妹・親戚などが平田学を信奉し、後でみる岩崎長世を信濃に招き、国学普及の口火を切ったと言われている。

角田忠行は、佐久郡長土呂村神主の家に天保5年に生まれ、安政2年（1855）8月に22才で平田門入りした。入門後は志士と交わり政治活動に奔走したので、父親の入門を紹介した安政5年前後は、紹介者が少ない。代わって地域で入門紹介したのは、父角田信常や岩村田の柏原重禧、田之口の田中則之らであった。忠行自身は、安政期には江戸へ出て常陸や相模の祠官・神主たちを紹介した。文久3年には京都へ出て、足利三代木像梟首事件に関与して逐われ、信州伊那谷に潜行した。御一新後の一年間は紹介者が急増するが、自らは

他国で奔走し、郷里の佐久地方ではかつて自分が紹介をして門人になった仲間たちが集中して入門の紹介をした⁽⁷⁾。

北原稲雄は、伊那郡座光寺村の庄屋の家に生まれたが、安政6年2月に岩崎長世の紹介により平田没後門に入門した。読書を好み和歌に優れ、鏗の舎と号し、寺子屋を開いて郷土の師弟を教育した。竹村（のち松尾）多勢子と姻戚関係があるが、平田学の普及に努めて下伊那平田派のリーダーであった。弟今村豊三郎・親戚伴野村竹村多勢子・黒田村斎藤保輔などを紹介し、彼ら有能な門人たちがまた何人かを紹介するなどして、門人の輪は広がり北原中心のグループは90人をこえた。稲雄自身は、木曾伝馬事件で木曾福島役所に出訴したり、元治元年には水戸浪士の伊那谷通過に際して、弟豊三郎とともに当時伊那谷各地に潜伏中であった角田忠行らと水戸浪士隊の間道通行に尽くすなど、学問を続けるというより村方に留まりつつ政治的動きと関わる軌跡を残した。

片桐春一は安政4年5月に入門したが、片桐家は幕府交代寄合山吹座光寺家の老臣にあたり、入門当時は家老職に就いていた。春一は伊那谷在住者で最初の平田門国学入門者であり、「誓詞帳」の片桐のところにはまだ紹介者名がない。春一の門人紹介は文久2年にはじまり、まず田島村前沢弥一右衛門（萬重）と座光寺家家老の石神権五郎（政昌）を入門させ、この両者とともに山吹社中（グループ）を形成する。春一自身は慶応2年に死亡するが、このグループには明治3年1月まで入門者があり、合計で60人をこえた。片桐そして石神が主導するこの社中は、家老の立場からの要請が反映し、平田学と尊王攘夷の受容には、内外にわたる危機の深刻化する中で、家中の士気の鼓舞と一体感醸成の意図がつよく、農兵制をすすめる、篤胤著作の「古史伝」・「玉禰」の上木（出版）、書籍講、本学神社創建などの文化運動を推進した。慶応4年鳥羽伏見戦争後は、いち早く官軍＝総督

府側につく方針を決め、官軍先鋒隊として伊那谷を通過した高松隊へ30人の人員を提供して従軍させるなど、御一新への対応は早かった⁽⁸⁾。

倉沢義随は、伊那郡小野村の里正の出身で、文久2年1月に佐久郡塩名田の丸山近良の紹介で入門した。その丸山は先述した角田忠行の紹介によって入門した者で、義随は角田とは嘉永5年から親交しはじめていた。安政4年に家督を嗣いだ義随は、中山道の和宮通行助郷軽減をめぐる訴訟で江戸へ出府中に入門手続きをしたのであった。入門直後の文久・元治期は志士活動に奔走し、文久3年の足利三代木像梟首事件により伊那谷へ逃げ込んだ角田忠行を匿い、元治元年の水戸浪士の通行には北原稲雄らと協力して、浪士隊の間道通行をはかった。慶応元年に上京すると、京都の伊勢屋久兵衛や矢野玄道・岡元太郎・巢内式部などの国学者、また長州藩の品川弥二郎を訪ねるなどして志士活動をした。義随が平田門人の拡大を図って紹介をするようになったのは慶応2年、つまり前年慶応元年の上京の目的であった神祇伯白川家に入門が叶い、出身の小野村の神葬祭改式を意図してからであった。この改式運動は寺院側のつよい反対に遭い、倉沢家は家産を大きく費消したというが、明治元年には自村・他村合わせて26人を紹介して入門させていた⁽⁹⁾。

信濃における平田門人の形成について概略検討してきたが、以下では『夜明け前』の世界と関わりがあるという意味において、岩崎長世・羽田野敬雄・西川吉輔三人の門人獲得・紹介の軌跡を検討しておきたい⁽¹⁰⁾。

岩崎長世は、甲府生まれで松井直太郎といっていたので、平田家の「誓詞帳」には「天保十年己亥十一月十六日 甲斐国府中 松井直太郎 藤原直世 三十三歳」と書かれている。長世の経歴には不明な点が多く、その後も各地に移り住んだので、出身地を江戸とか摂津などと誤記するものが少なくない。尊王論を学び、和歌をよく詠み、能

第2表 岩崎長世紹介入門者

No.	入門年月日			国名	郡村名	人名		年	役職
	年	月	日			氏名	名		
1	安政6年	1859	2	信濃国	伊奈郡座光寺村	北原森右衛門	源 信質	35	—
2	安政6年	1859	正 元	信濃国	伊奈郡清内路村	原武右衛門	信好	38	—
3	安政6年	1859	11 3	信濃国	伊奈郡飯田	奥村吉左衛門	橘 邦秀	25	—
4	安政7年	1860	正 17	信濃国	伊奈郡飯田藩	松井正意	源 美澄	67	—
5	万延2年	1861	正 18	信濃国	伊那郡飯田	久保田清兵衛	藤原綱根	32	—
6	万延2年	1861	正 18	信濃国	伊那郡阿島	近藤太造	藤原至邦	33	知久縄市郎元家来
7	文久元年	1861	4	信濃国	筑摩郡木曾山口	外垣範助	紀 重護	36	—
8	文久2年	1862	3	信濃国	諏訪郡高嶋	武居惣蔵	金刺則学	22	—
9	文久2年	1862	5	信濃国	伊奈郡飯田知久町	樋口与兵衛	源 光信	26	—
10	文久2年	1862	11 3	信濃国	伊那郡久米村	阪井醇之助	居平	31	—
11	文久3年	1863	3 3	信濃国	伊奈郡飯田(後伊勢国川崎小川氏養子)	久保田禎造	信道	17	—
12	文久3年	1863	3 4	信濃国	伊奈郡伊野村	松尾左次右衛門	源 誠哉	—	—
13	文久3年	1863	3 4	信濃国	伊奈郡林村	大原慎三郎	—	—	—
14	文久3年	1863	3 4	信濃国	同山本邑	竹村太右衛門	—	—	—
15	元治元年	1864	8	摂津国	難波新地三丁目	高山清吉	源 国見	52	—
16	元治元年	1864	8	摂津国	長堀十丁目	莊司善五郎	広業	27	—
17	元治元年	1864	8	摂津国	長堀十丁目	浜口与助	御舟	38	—
18	元治元年	1864	8	摂津国	難波新地本京橋町	小松原清次郎	安世	49	—
19	元治元年	1864	8	摂津国	同平野町二丁目	淵上孫七	平 亀雄	27	—
20	元治元年	1864	8	摂津国	同北久太郎町一丁目	吉田弥兵衛	良金	25	—
21	元治元年	1864	8	摂津国	同島之内南笠町	千葉左近	平 是胤	29	—
22	元治元年	1864	9 19	和泉国	堺殿馬場	坂上定七郎	源 道男	29	—
23	元治元年	1864	9 19	山城国	京産(摂津国大坂心齋)	島津清四郎	尚美	32	—
24	元治元年	1864	9 19	江戸	江戸産(同船場西横堀)	小川常二郎	真水	41	—
25	元治元年	1864	9 19	和泉国	堺北材木町	上田信麿	源 成章	38	—
26	元治元年	1864	9 19	和泉国	同九軒町	高山保之助	大江慶孝	27	—
27	元治元年	1864	9 19	摂津国	大坂心齋橋	莊司勝之助	広達	21	—
28	元治元年	1864	9 19	摂津国	同新町九軒	田蓑涼碩	源 親秀	52	—
29	元治元年	1864	9 28	摂津国	浪速	寺村勘兵衛	明敬	43	—
30	元治元年	1864	11 30	石見国	津和野	加藤順造	達	—	—
31	元治元年	1864	11	江戸	一橋殿内	千代田源吉郎	義融	—	—
32	元治元年	1864	11	摂津国	浪速玉作里人	大館喜代松	源 有親	22	—
33	元治2年	1865	正 8	伊予国	宇和島藩	宮本岡右衛門	藤原光敏	61	—
34	元治2年	1865	正 9	摂津国	浪速	平瀬泰之助	源 春枝	27	—
35	元治2年	1865	2 10	筑前国	怡土郡蔵持村	清沢典膳	源 豊実	25	—
36	元治2年	1865	2 13	和泉国	堺北材木町	上田松野子	—	33	—
37	元治2年	1865	2 23	和泉国	大鳥郡堺北中之町	森川源右衛門	源 道富	36	—
38	元治2年	1865	3 5	大和国	平群郡笠目村	佐々木左京	源 信重	56	—
39	慶応元年	1865	4 15	摂津国	浪華嶋之内	溝野元孝	高康	38	—
40	慶応元年	1865	7 晦	土佐国	土佐国藩	池栄六	平 清水	27	—
41	慶応元年	1865	7 晦	土佐国	土佐国藩	浜田五郎次郎	正宣	25	—
42	慶応元年	1865	9 15	摂津国	大坂高津	秋野一斎	藤原一之	32	—
43	慶応元年	1865	10 朔	摂津国	同所島之内	岸部宇兵衛	春道	37	—
44	慶応元年	1865	11 12	大和国	吉野郡吉野山	近藤喜三郎	平 成治	27	—
45	慶応元年	1865	7 5	摂津国	浪華	滋岡陸奥守	菅原長養	—	天満宮神主
46	慶応2年	1866	正 15	江戸		大林弥門	藤原親賢	28	江戸旗下
47	慶応2年	1866	正 15	江戸		大前劔四郎	源 重幸	27	江戸旗下
48	慶応2年	1866	正 15	江戸		堀七之助	源 利重	26	江戸旗下
49	慶応2年	1866	正 15	江戸		荒井弥太郎	藤原 弥	21	江戸旗下
50	慶応2年	1866	正 15	江戸		中川蔵次郎	源 義路	21	江戸旗下
51	慶応2年	1866	正 18	美濃国	大垣医員	高木玄宣	貞真	48	摂津大坂立売堀中橋北塘寓
52	慶応2年	1866	2	土佐国	土佐国藩	池寛九郎	平 清忠	24	—
53	慶応2年	1866	3 3	信濃国	高島	三木金蔵	源 貞予	—	—
54	慶応2年	1866	9 26	摂津国	大坂	橋本左兵衛	藤原経恒	41	—
55	慶応2年	1866	12 5	和泉国	堺	小西六兵衛	源 治重	48	—
56	慶応2年	1866	12 5	和泉国	堺	村上和助	源 吉保	35	—

57	慶応3年	1867	正	7	摂津国	住吉社家	浅井安太郎	幽清	17	—
58	慶応3年	1867	正	15	摂津国	西生郡	野口兵庫	源 由常	27	師木津社
59	慶応3年	1867	2	朔	摂津国	浪速	橋本彦三郎	藤原豊年	17	—
60	慶応3年	1867	2	7	摂津国	浪速	中西式部	藤原生昭	33	—
61	慶応3年	1867	2	9	摂津国	浪速	佐野莊次郎	藤原忠健	21	—
62	慶応3年	1867	4	11		(白川殿任学師(士))	那波又太郎	源 大	53	白川殿任学師
63	慶応3年	1867	3	5	摂津国	大坂堂嶋	中島真六	悦恭	53	—
64	慶応3年	1867	3	5	美濃国	本巢郡芝原北方駒来町(大坂永来町住)	守屋忠助	忠功	26	—
65	慶応3年	1867	3	5	摂津国	大坂島之内住(尾張国名古屋古渡新町)	横倉栄助	善之	26	—
66	慶応3年	1867	3	5	摂津国	大坂安堂寺町四町目	河路藤八	思恭	25	—
67	慶応3年	1867	5		越後国	高田	吉田桂太郎	好古	21	—
68	慶応3年	1867	8	朔	摂津国	浪花善左衛門町	赤松弥七	源 守名	51	—
69	慶応3年	1867	3	25	山城国	皇都押小路殿内	中村式部	源 敬重	20	—
70	慶応3年	1867	6	19	摂津国	大坂上町	山下貞斎	源 果行	61	—
71	慶応3年	1867	6	19	摂津国	大坂上町	山下卓爾	源 知行	22	—
72	慶応3年	1867	6	19	摂津国	大坂上町	細川弥助	源 知義	38	—
73	慶応3年	1867	7	朔	信濃国	飯田	木村幸之助	義建	40	—
74	慶応3年	1867	6	15	摂津国		谷 藤兵衛	源 秀清	20	—
75	慶応3年	1867	7	3	山城国	皇都	真鍋葵斎	藤原豊平	59	正親町殿家令
76	慶応3年	1867	8	21			加藤重兵衛	藤原泰治	41	—
77	慶応3年	1867	8	21			高 伊兵衛	源 長栄	24	—
78	慶応3年	1867	10	6	摂津国	住吉社家	田中和佐大夫	大宅光伴	22	—
79	慶応4年	1868	正	2	大和国	吉野郡吉野山	万栄穂伊織	大中臣守常	27	水分宮神主
80	慶応4年	1868	正	2	大和国	吉野郡吉野山	万栄穂帯刀	大中臣守長	21	水分宮
81	慶応4年	1868	正	2	大和国	吉野郡吉野山	福隅清記	橘 正保	56	—
82	慶応4年	1868	正	2	大和国	吉野郡吉野山	福隅磯之進	橘 正光	21	—
83	慶応4年	1868	正		摂津国	大坂島之内御前町	小谷秀次郎	政利	17	—
84	慶応4年	1868	正	24	摂津国	大坂京町堀一町目	佐伯嘉蔵	真区	14	—
85	慶応4年	1868	正	27	大和国	吉野郡吉野山	福住舎人	正光	25	—
86	慶応4年	1868	2	9	摂津国	西成郡大阪	三津陸奥守	義忠	30	三津八幡宮神主
87	慶応4年	1868	3	4	越後国	頸城郡糸魚川	田村造酒之助		44	—
88	慶応4年	1868	3	4	越後国	頸城郡糸魚川	小柳四方八	重孝	30	—
89	慶応4年	1868	3	4	越後国	糸魚川	松山耶須士	篤之	23	—
90	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	加藤右京	采女春脩	37	春日社祢宜
91	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	酒殿大炊	采女春恒	57	—(春日社祢宜)
92	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	梅木播磨	采女春郷	39	春日社祢宜
93	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	和上谷縫殿	藤原宗明	39	—(春日社祢宜)
94	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	福井左馬	采女春韶	35	—(春日社祢宜)
95	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	梅本(木)大夫	采女安民	33	春日社祢宜
96	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	梅木兵部	采女春英	32	春日社祢宜
97	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	藤岡左近	藤原守公	31	春日社祢宜
98	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	中村右衛門	采女安定	29	春日社祢宜
99	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	丹坂加賀	采女春秀	28	春日社祢宜
100	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	山本斎宮	采女春茂	25	春日社祢宜
101	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	山口織部	菅原永訓	25	春日社祢宜
102	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	梅木内蔵	采女春浄	23	春日社祢宜
103	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	酒殿大夫	采女春盈	20	春日社祢宜
104	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	梅田主水	采女春保	19	春日社祢宜
105	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	藤間図書	藤原守房	18	春日社祢宜
106	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡	福井斎宮	菅原永頼	16	春日社祢宜
107	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡郡山藩	河合良馬	良国	24	—
108	慶応4年	1868	4	29	大和国	添上郡郡山(塩)魚町	野戸佐助		45	—
109	慶応4年	1868	4	29	摂津国	住吉神祝	梅園貫雄	義貫	22	神宮寺坊内千寿院改
110	慶応4年	1868	4	29	摂津国	住吉神祝	松本廉雄	義連	26	元照洞院改
111	慶応4年	1868	4	29	摂津国	住吉神祝	梅園儀雄	義儀	22	元
112	慶応4年	1868	4	29	摂津国	住吉神祝	浅井 眷	幽眷	48	元玄影改
113	慶応4年	1868	4	29	摂津国	住吉神祝	林 正	快厳	18	元正温事

第3表 羽田野敬雄紹介入門者

No.	入門年月日			国名	郡村名	人名		年	役職
	年	月	日			名	名		
1	文政13年	1830	3 10	三河国	三河国宝飯郡一ノ宮村	草鹿砥肥前守	藤原朝臣 宣輝	34	草鹿砥神社神主
2	天保2年	1831	5 22	三河国	渥美郡牟呂村	森田讀岐・	源 光義	28	八幡宮神主
3	天保2年	1831	5 25	三河国	渥美郡吉田城内	石田式部	秀堅	30	鎮守天王宮神主
4	天保3年	1832	正 11	伊勢国	山田	前川久太郎	締彦	34	—
5	天保3年	1832	8	三河国	宝飯郡八幡村	寺部主殿	大伴宣光	22	八幡宮神主
6	天保2年	1831	8 20	三河国	旛(幡)頭郡佐久島	筒井吉太郎	平 寄風	—	—
7	天保2年	1831	8 20	三河国	幡豆郡佐久嶋村	伊藤左吉・	菅原清海	—	—
8	天保3年	1832	10	三河国	八名郡賀茂村	竹尾大和守	賀茂茂樹	27	賀茂神社神主
9	天保3年	1832	閏11 13	三河国	宝飯郡長沢	松平大炊介	源 信平	19	諏方社大祝杉浦伊勢守 養子
10	天保4年	1833	5 3	三河国	宝飯郡長沢	松平原七郎	源 親直	25	(松平大炊之介兄)
11	天保5年	1834	2 27	三河国	八名郡賀茂村	加藤長門	高師連嘉 貴	29	賀茂明神社家大伴明神 祢宜
12	天保5年	1834	2 25	三河国	宝飯郡一宮村	草鹿砥勲解由	藤原宣隆	17	草鹿砥神社神主
13	天保5年	1834	2 25	三河国	宝妖郡篠束村	本多出雲	藤原光臣	32	天王社神主
14	天保5年	1834	2 27	三河国	宝妖郡市田村	上島左門	藤原貞義	30	天王社神主
15	天保5年	1834	6 23	三河国	宝飯郡長沢	松平帯刀	源 親年	17	松平原七郎弟
16	天保6年	1835	2 5	三河国	渥美郡吉田駅	鈴木兵部	穂積重実	24	熊野社神主
17	天保9年	1838	4 11	三河国	宝飯郡当古村	大林三郎	源 埴彦	18	天王社神主
18	天保13年	1842	正 2	三河国	渥美郡吉田	木村猪左衛門	正樹	—	—
19	天保15年	1844	5 15	三河国	渥美郡吉田藩	亀井太郎治	源 重時	21	—
20	嘉永2年	1849	2 18	三河国	設楽郡新城町	加藤惣左衛門	藤原從繩	29	—
21	嘉永2年	1849	5	三河国	渥美郡牟呂村	森田播磨	源 光尋	25	八幡宮神主
22	文久3年	1863	2 26	三河国	八名郡賀茂村	加藤監物	大伴千秋	28	大伴大明神奉仕
23	文久3年	1863	9 19	三河国	設楽郡稲橋村	古橋源六郎	源 暉兒	51	—
24	文久3年	1863	11 3	三河国	宝飯郡一宮村	草鹿砥舍人	藤原 文	30	草鹿砥宣隆弟
25	元治元年	1864	4	三河国	渥美郡吉田羽田村	羽田野兵部	羽田茂雄	24	神明・八幡宮神主
26	元治元年	1864	4	三河国	渥美郡吉田羽田村	広岩右近	平 敬貞	27	秋葉庚申両社神主
27	元治元年	1864	4	三河国	渥美郡吉田方郷羽田邑	広岩主水	平 敬敏	48	秋葉庚申両社神主
28	元治元年	1864	4	三河国	宝飯(飯)郡御馬湊	鈴木静衛	穂積光重	28	—
29	元治元年	1864	5	三河国	同郡西方村	鈴木太郎治	茂一	28	—
30	慶応元年	1865	閏 5	三河国	八名郡宇利荘小川里	菅沼耕兵衛	源 定敬	39	—
31	慶応元年	1865	9	三河国	八名郡小川里	菅沼八左衛門	定春	48	—
32	慶応2年	1866	5	遠江国	引佐郡井伊郷神宮寺村	山本大隅	藤原直躬	41	渭伊神社神主
33	慶応2年	1866	5	遠江国	敷智郡笠子荘新所村	内藤山城	藤原信足	32	広旗八幡宮神主
34	慶応2年	1866	5	遠江国	同郡宇布見邑	加(賀)茂備後	橘 直章	27	金山大明神神主
35	慶応2年	1866	5	遠江国	敷智郡笠子荘岡野郷岡崎邑	菅沼安次郎	源 正重	36	—
36	慶応2年	1866	5	遠江国	敷智郡岡部郷	岡部御楯	賀茂政隆	18	賀茂新宮神主次郎左衛 門男
37	慶応2年	1866	5	遠江国	同郡宇布見里	中村源左衛門	源 貞則	46	天神宮神主
38	慶応2年	1866	5	遠江国	豊田郡川袋里	長谷川権太夫	藤原貞雄	22	水神宮神主
39	慶応2年	1866	5	遠江国	敷智郡浜松	池田荘次郎	橘 勝古	24	愛宕下村長
40	慶応2年	1866	7	三河国	渥美郡田尻村	宮林要人	藤原嘉憲	39	神明宮神主
41	慶応2年	1866	7	三河国	八名郡牛川村	本多半右衛門	藤原為炳	55	—
42	慶応2年	1866	12	三河国	八名郡賀茂村	竹尾能登守	梶主重毅	37	賀茂大明神神主
43	慶応2年	1866	12	三河国	宝飯郡八幡村	寺部主殿	大伴親光	25	八幡宮神主
44	慶応3年	1867	2	三河国	八名郡宇利荘小川里	菅沼耕一郎	定道	10	—
45	慶応3年	1867	2	三河国	八名郡宇利荘吉田里	荘田講蔵	喜章	48	—
46	慶応3年	1867	2	三河国	同荘巢山里	仲井伊兵衛	藤原喜保	34	—
47	慶応4年	1868	3 10	三河国	渥美郡吉田城内	大宮司五位	藤原守富	40	神明宮神主
48	慶応4年	1868	3 10	三河国	吉田城内	石田伊勢守	正祐	—	正一位吉田天王社神主
49	慶応4年	1868	3 10	三河国	八名郡牛川村	平尾宮内	親章	—	熊野三社神主
50	慶応4年	1868	3	遠江国	敷智郡笠子荘新所村	伊藤安右衛門	藤原傳旧	38	—
51	慶応4年	1868	3	遠江国	敷智郡笠子荘新所村	伊藤孫左衛門	藤原佳芳	38	—
52	慶応4年	1868	3	遠江国	敷智郡笠子荘新所村	木本東一郎	源 叙重	35	—
53	慶応4年	1868	3	遠江国	敷智郡笠子荘新所村	菅沼武三郎	源 義生	—	—
54	慶応4年	1868	3	遠江国	敷智郡笠子荘新所村	中邨又一郎	孝道	—	—

55	慶応4年	1868	3		遠江国	敷智郡笠子荘新所村	鈴木七郎左衛門	穂積茂朝	23	—
56	慶応4年	1868	3		遠江国	敷智郡笠子荘新所村	山本五吉	貞叙	—	—
57	慶応4年	1868	3		遠江国	敷智郡笠子荘新所村	迹見玄斎	武正	35	—
58	慶応4年	1868	3	20	三河国	吉田藩	中山弥助	繁樹	—	—
59	慶応4年	1868	閏4	6	三河国	設楽郡新城	鈴木弥兵衛	重興	49	—
60	慶応4年	1868	閏4	6	三河国	設楽郡新城	加藤摠左衛門	清治	26	—
61	慶応4年	1868	5	10	三河国	宝飯郡一宮村	草鹿砥孫	藤原宣讓	20	—
62	明治元年	1868	11	10	三河国	碧海郡桜井村	野田筑後守	紀勝昌	56	桜井社神主
63	明治元年	1868	12	14	三河国	岡崎城内	賀茂鞆負	源久常	19	菅生社神主二男
64	明治2年	1869	8		三河国	額田郡西大平藩	篠崎正香	橘雅邦	53	—
65	明治2年	1869	11	14	三河国	吉田藩	中山左衛士	英風	16	中山繁樹男
66	明治3年	1870	12	28	遠江国	堀江藩	大沢從四位	藤原基寿	24	知事
67	明治3年	1870	12	28	遠江国	藩学正	福嶋	藤原典教	27	—
68	明治4年	1871	1	2	参河国	宝飯郡下地村	山下幸八	文丈	52	—
69	明治4年	1871	1	2	参河国	渥美郡豊橋駅船街	斎藤昱太郎	紀致真	28	—
70	明治4年	1871	1	15	三河国	豊橋藩	小川清蔭	—	—	—
71	明治4年	1871	10	2	三河国	宝飯郡篠東村	本多匡	光輝	39	篠東神社神主
72	明治4年	1871	10	2	三河国	豊橋県	川村由衛	源貴直	—	—
73	明治4年	1871	10	2	三河国	豊橋県	富田良穂	—	24	—
74	明治6年	1873	5	18	尾張国	知多郡横須賀村	坂正臣	—	—	—
75	明治7年	1874	5		三河国	渥美郡松島村	岡田豊暉	—	24	—
76	明治7年	1874	5		三河国	渥美郡牟呂村	森田光文	—	21	—
77	明治8年	1875	5		三河国	宝飯郡西方村	山本種次	穂積重甫	13	—
78	明治8年	1875	5		三河国	宝飯郡御馬湊	鈴木善蔵	—	16	—
79	明治8年	1875	5		三河国	宝飯郡御馬湊	鈴木英次郎	—	11	—

第4表 西川吉輔（吉介）紹介入門者

	入 門 年 月 日	国 名	郡 村 名	人 名	年	役 職	摘 要
1	嘉永7年 1854 正 19	豊前国	宇佐郡	岩坂進	30	宇佐宮祠官	後建平
2	嘉永7年 1854 2 18	因幡国	鳥取藩	白井弾正 平 貞幹	42	—	
3	安政4年 1857 12 3	近江国	信楽郡信楽	藤尾東作 景秀	—	—	
4	安政4年 1857 5	山城国	左京三条街	長尾郁三郎 平 武雄	20	—	文久3年足利事件
5	安政5年 1858 正 25	近江国	蒲生郡日牟礼	谷 安太郎 源 正輔	16	八幡宮神主谷大隅男	
6	安政5年 1858 正 25	近江国	蒲生郡日牟礼	岳 伊左美 源 義純	21	八幡宮神主岳石見男	
7	安政5年 1858 正 28	石見国	鹿足郡津和野藩	福羽文三郎 源 美静	27	—	福羽幸十郎美質男
8	安政6年 1859 2 15	備中国	笠岡住備前岡山藩	平嶋后太郎 源 則定	—	—	改字野助太郎
9	万延2年 1861 正 2	近江国	蒲生郡八幡	本莊敬造 知 貞	32	—	
10	万延2年 1861 正 2			喜多与三平 真 鈞	28	—	
11	万延2年 1861 正 2			木戸留次郎 善 英	20	—	
12	文久元年 1861 4 10	近江国	蒲生郡日牟礼	福永織江 藤原貞幸	30	日牟礼神社社司	
13	文久元年 1861 5 25	近江国	犬上郡	車戸造酒 藤原宗功	27	犬上郡多賀大社社宜	車戸宗常男
14	文久2年 1862 2 2	近江国	蒲生郡中村	江南莊兵衛 美 古	47	—	
15	文久2年 1862 正 2	近江国	蒲生郡八幡	小森源藏 正 武	38	—	
16	文久2年 1862 正	近江国	蒲生郡八幡	谷熊次郎 春 重	28	—	
17	文久2年 1862 2 13	近江国	蒲生郡	深尾丹後守 源 行真	—	佐々木大神大宮司	
18	文久2年 1862 3 19	周防国	都濃郡富田莊	渡辺新三郎 常 品	30	山崎社神主直道男	
19	文久2年 1862 9 25	長門国	—	片山貴一郎 藤原高邨	—	—	
20	文久2年 1862 12 9	山城国	(皇都二条御城番組与力)	内藤音三郎 藤原興利	28	皇都二条御城番組与力	市郎右衛門男
21	文久2年 1862 12 9	近江国	蒲生郡八幡	本莊脩造 知 和	20	—	敬造知貞舍弟
22	文久3年 1863 正 25	備前国	岡山	土肥典膳 平 隆平	—	—	
23	文久3年 1863 9 3	近江国	坂田郡	藤田大和 藤原正信	32	坂田神明宮神主	
24	元治元年 1864 9 28	近江国	(朽木山城守内)	大内順右衛門 有 慶	29	朽木山城守内	
25	元治元年 1864 9 25	近江国	蒲生郡八幡	高田喜太郎 義 甫	19	—	
26	元治元年 1864 9 25	近江国	日野	島崎金兵衛 一	—	—	
27	元治元年 1864 11 27	近江国	蒲生郡八幡	小島伝兵衛 吉 陸	28	—	
28	元治元年 1864 11 27	近江国	蒲生郡八幡	野矢市兵衛 輔 忠	24	—	
29	元治2年 1864 1 2	近江国	蒲生郡八幡	西川与志子 一	38	西川善六吉輔妻	
30	慶応元年 1865 9 1	近江国	蒲生郡八幡	西谷治平 賢 義	—	—	
31	慶応元年 1865 9 1	近江国	同郡市井村	野間伝六郎 御 蔭	18	—	
32	慶応2年 1866 6	近江国	蒲生郡八幡	池本宇兵衛 輔 直	24	—	
33	慶応2年 1866 7 17	近江国	同郡東古保志塚村	西村吉太郎 源 久岑	—	—	
34	慶応3年 1867 正	近江国	犬上郡山崎	滝沢豊後 久 延	38	天満宮神主	
35	慶応3年 1867 2	近江国	郡栗見莊	藤田筑前 正 秀	—	摠社大宮天神社神主	
36	慶応3年 1867 2	近江国	神崎郡宮西村	居原田泰造 久 方	35	—	
37	慶応3年 1867 2	近江国	神崎郡本莊村	田口永之介 景 応	27	—	改助作
38	慶応3年 1867 2	近江国	愛知郡下一色村	文屋大内蔵 源 安貞	38	押立神社神主	
39	慶応3年 1867 2	近江国	愛知郡下一色村	文屋撰津 源 安平	16	—	大内蔵安貞男
40	慶応3年 1867 2	近江国	同郡豊満村	菅原豊後 菅原秀親	—	正一位旗神豊満大社神主	
41	慶応3年 1867 2	近江国	神崎郡木流村	田中大和 重 交	46	—	
42	慶応3年 1867 2	近江国	同郡奥村	沖 丹後 重 和	21	—	
43	慶応3年 1867 2	近江国	同郡伊之部村	布施和泉 次 清	—	建部神社神主	
44	慶応3年 1867 2	近江国	同(神崎)郡八日市	芝 順吉 義 勝	—	—	
45	慶応3年 1867 2	近江国	神崎郡神田村	大野吉之丞 久 重	30	—	
46	慶応3年 1867 2	備前国	備前国藩生国肥前(蒲生郡八幡住)	児島一郎 源 昌豊	43	—	
47	慶応3年 1867 3 20	近江国	高嶋郡朽木	川北祐右衛門 清 茂	33	—	
48	慶応3年 1867 3 8	近江国	神崎郡伊庭村	村田九郎右衛門 忠 胤	35	—	
49	慶応3年 1867 3 12	近江国	神崎郡伊庭村	山脇丹後 藤原清次	34	牛頭天王多武大明神神主	
50	慶応3年 1867 3 21	近江国	同郡中村	中村出雲 中臣宗重	35	—	
51	慶応3年 1867 3 21	近江国	同郡中村	小幡但馬 中臣治親	44	—	
52	慶応3年 1867 3 21	近江国	神崎郡北之莊村	長部若狭 宗 房	16	—	
53	慶応3年 1867 3	近江国	蒲生郡西往来村	森辻達 正 道	—	—	
54	慶応3年 1867 3 21	近江国	同郡西大路	大神松代太夫 秀 信	24	—	

55	慶応3年	1867	6	11	近江国	犬上郡	新莊金吾	藤原宗武	27	多賀大社車戸宗常男	
56	慶応3年	1867	6	12	近江国	犬上郡	大岡右膳	大中臣宗宣	28	—	主水宗久男
57	慶応3年	1867	6	20	近江国	神崎郡八日市村	水谷与摠兵衛	茂隆	30	—	
58	慶応3年	1867	6	20	近江国	蒲生郡西生来村	吉田加賀	源 元物	45	進宮祭所	
59	慶応3年	1867	6	25	和泉国	伯太藩(蒲生郡西宿村住)	伊庭耕之助	源 貞剛	21	—	
60	慶応3年	1867	7		近江国	神崎郡田附村	塚本八郎兵衛	昌雄	38	—	
61	慶応3年	1867	7	20	近江国	蒲生郡西生来村	川島忠兵衛	藤原重言	49	—	
62	慶応3年	1867	7	20	近江国	蒲生郡西生来村	川島藤吉	藤原福重	19	—	忠兵衛重言男
63	慶応3年	1867	7	20	近江国	神崎郡浜野村	中沢正太郎	源 正則	25	—	
64	慶応3年	1867	7	10	近江国	彦根藩	乾 主税	正虎	23	—	八郎当令男
65	慶応3年	1867	8		近江国	愛知郡押立荘平松村	馬野喜兵衛	清平	31	—	
66	慶応3年	1867	12	1	近江国	神崎郡築瀬	吉岡寛斎	実連	37	—	
67	慶応4年	1868	1		近江国	蒲生郡中村	江南莊太郎	美古	47	莊兵衛美古男	
68	慶応4年	1868	2	朔	近江国	神崎郡建部郷	梅原山城	菅原弘定	—	日吉大宮大神主	
69	慶応4年	1868	2	朔	近江国	野洲郡小南村	神山出雲	平 房吉	32	国主大明神社主	
70	慶応4年	1868	2	朔	近江国	野洲郡津田村	津田忠右衛門	平 信成	27	十禪師神事元	
71	慶応4年	1868	2	朔	近江国	大津	滋賀信太郎		18	四之宮神主	
72	慶応4年	1868	2	8	近江国	野洲郡永原村	中島武四郎	重隆	24	—	
73	慶応4年	1868	2	8	近江国	同郡北村	木村源五郎	盛明	44	—	
74	慶応4年	1868	2	8	近江国	野洲郡永原村	実光坊	源 光貫	48	天神社別当	
75	慶応4年	1868	2	18	近江国	浅井郡河毛村	河毛次郎左衛門	政明	47	—	
76	慶応4年	1868	2		近江国	蒲生郡八幡	西川幸子		21	次郎	
77	慶応4年	1868	6	3		松井周防守内	高原 鼎	信久	40	—	
78	慶応4年	1868	6	21	近江国	蒲生郡八幡	伴常太郎	大伴資和	20	—	
79	慶応4年	1868	7	15	大和国	山辺郡	市磯相模守	大和宿祢義連	27	大国魂神社神主	
80	慶応4年	1868	7	19	大和国	山辺郡長柄村	勝井善六	藤原守信	55	—	
81	慶応4年	1868	7	19	大和国	山辺郡長柄村	永曾源太郎	藤原義基	27	—	
82	慶応4年	1868	7	19	大和国	城下郡法貴寺村	藤本若狭	藤原広明	37	池坐朝霧黄幡比壳神社神主	
83	慶応4年	1868	7		近江国	坂田郡鳥居本宿	吉村富吉	義忠	16	—	
84	慶応4年	1868	9	3	近江国	栗太郡辻村	田中七右衛門	藤原中臣知邦	22	—	
85	明治元年	1868	9	19	近江国	野洲郡六条村	山本吉之進	源 輔国	18	—	
86	明治元年	1868	10	10	大和国	山辺郡	森田伊三郎	藤原正喬	28	大和神社宮座	
87	明治元年	1868	10	10	大和国	山辺郡	森継平三郎	藤原正光	46	—	
88	明治元年	1868	10	24			中山松丸	藤原朝臣忠護	15	—	
89	明治元年	1868	10	24	近江国	彦根藩	林貞三郎	源 完元	21	井伊掃部頭家来	
90	明治元年	1868	10	26	近江国	犬上郡小川原村	北川善兵衛	藤原清光	50	須佐之男神社神主	
91	明治元年	1868	10	30	撰津国	河辺郡兒屋庄野間村	野間上総	藤原広長	55	郷土	
92	明治元年	1868	11	22	山城国	葛野郡	小林土佐	大江直中	50	愛宕護社々人	
93	明治元年	1868	11	22	山城国	葛野郡	福野越中	源 且道	45	—	
94	明治元年	1868	11	22	山城国	葛野郡	芦原伊豆	源 邦成	43	—	
95	明治元年	1868	11	22	山城国	葛野郡	杉村因幡	大江憲章	25	—	
96	明治元年	1868	11	22	山城国	葛野郡	富永豊後	源 知喬	21	—	
97	明治元年	1868	12	5			滝本嘉寿丸	藤原乘親	30	男山(八)幡宮次官	
98	明治2年	1869	1	22	撰津国	住吉郡	池田主殿	親都	45	方違大依羅神社神主	
99	明治2年	1869	1	23	近江国	蒲生郡八幡	岩間立本	知久	51	—	
100	明治2年	1869	1	23	近江国	蒲生郡八幡	小嶋久七	輔久	32	—	
101	明治2年	1869	1	23	近江国	蒲生郡上平木村	福井宗助	春幸	23	—	
102	明治2年	1869	1	24	近江国	蒲生郡八幡	木戸清兵衛	坤六	60	—	
103	明治2年	1869	2	1	近江国	高嶋郡朽木荒川村	坂本元造	藤原直信	42	—	
104	明治2年	1869	2	1	近江国	高嶋郡朽木荒川村	坂本助之丞	藤原正延	26	—	
105	明治2年	1869	2	1	近江国	高嶋郡朽木荒川村	三原与作	藤原光儀	47	—	
106	明治2年	1869	2	1	近江国	高嶋郡朽木荒川村	中村要介	藤原清秀	51	—	
107	明治2年	1869	2	1	近江国	高嶋郡朽木荒川村	石田吉之進	藤原清定	38	—	
108	明治2年	1869	2	1	近江国	高嶋郡朽木荒川村	山本銀蔵	源 光和	45	—	
109	明治2年	1869	2	1	近江国	高嶋郡上古賀村	平井多造	藤原政道	55	—	
110	明治2年	1869	2	19	和泉国	堺	三上敦馬	格隆	41	堺湊船待社神主	
111	明治2年	1869	3	9	和泉国	堺	五嶋相模	源朝臣彝正	28	開口神社	
112	明治2年	1869	9	16	近江国	栗太郡辻村	田中稲人	藤原稲人	17	—	
113	明治3年	1870	5		陸奥国	松前館藩	下国鉄人	安部季照	17	—	
114	明治3年	1870	5		近江国	大溝藩	三宅三平	藤原玄詐	19	—	
115	明治7年	1874	12	28	近江国	阪(坂)田郡伊吹村	伊夫伎資弼	—	23	伊夫伎神社祠掌	

楽師となって笛と鼓を教えて生活の糧にした。諏訪高島の平田門人松沢義章を頼って諏訪に入り、嘉永5年(1852)秋に信州飯田に移り住んだ。ここでも笛と鼓を教えながら平田国学を広めはじめた。その効果が現れたのは数年後で、安政6年(1859)から岩崎長世の紹介による入門者が生まれた。長世の仲介による入門者は、座光寺村の北原稲雄、清内路村の原信好、飯田の奥村邦秀、阿島の近藤至邦、伴野村の松尾多勢子の長男松尾誠哉など、後に伊那谷の有力な平田門国学者になる人材が多く含まれていた。

長世の信州における紹介活動は文久3年(1863)3月までであった。それは、彼の平田学普及への動きが飯田藩に警戒され、飯田に居住を続けられなくなったからである。文久3年7月にここを去り、京都へ出て神祇伯白川家の学師となった。しかし、同年8月18日政変が起きると京都を逐われ、大坂へ移った。なおも活動を続け、翌元治元年8月から摂津国、和泉国・大和国などで平田門への入門紹介活動を繰りひろげた。とくに慶応期に入ってから門人獲得数は急増した。御一新後の慶応4年4月には、春日神社の「大和舞」を鼓吹した関係で、同神社祢宜たちの大量の入門があった。明治期には、豊国神社・住吉神社の宮司となり、明治12年(1879)に難波神社の祠官として生涯を閉じた⁽¹¹⁾。

三河地方平田門の中心人物羽田野敬雄は、寛政10年(1798)2月、大岡越前守領地三河国宝飯郡西方村に神主山本兵三郎(茂義)の4男に生まれた。文政元年(1818)21歳の時に、三河国渥美郡羽田村の羽田神明社・八幡宮神主の羽田野敬道の養子となった。この時から天保4年(1833)4月の養父隠居までの間に、漸次羽田野家のことを譲り受け羽田野家を相続したが、相続以前の文政10年7月に、三河居住者としては最初に平田篤胤の生前門に入門している。

篤胤の死去は天保14年9月であるが、敬雄はす

でにこの時まで三河国で17人、伊勢国で1人、計18人を紹介していた。篤胤没後は平田門の継承者鉄胤と親交し、その門人獲得に協力している。天保15年1人、嘉永2年2人、文久3年3人、元治元年5人、慶応元年2人、慶応2年12人、慶応3年3人と多くなり、御一新後は慶応4年17人、明治2年2人、明治3年2人、明治4年6人、明治6年1人、明治7年2人、明治8年3人、合計79人を紹介している。羽田野敬雄の紹介活動は、慶応4年3月の遠江国新所村の8人の場合を除けば、ほとんどが三河国内に限られ、しかも神主の比重が高い。

羽田野敬雄は、慶応4年2月に竹尾東一郎らと稜威隊を組織して、東海道を進軍する官軍に従軍した点を除くと、三河吉田に居続けた。幕末期には多くの門人を紹介しつつ志士活動を援け、各地の動向に関する情報を集め、同志たちとやりとりした膨大な書翰を残した。高齢であったことが主要な理由であるが、いわゆる志士とは一線を画し、あくまでも郷里をとび出すことはせず門人拡大を図った典型的な人物である⁽¹²⁾。

西川吉輔は吉介とも書くが、はじめは善六と称した。近江国蒲生郡八幡の肥料・米穀商の子に生まれるが、学問を好み、天保13年に27歳で大國隆正門に入門し、32歳の弘化4年(1847)に、播磨国赤穂の平尾直助(可寛)の紹介により平田没後門に入門した。その翌年に自宅に私塾「帰正館」を開き、以後ここで習った門人数は150人をこえたといわれる。

嘉永7年に大分宇佐神宮の神主と鳥取藩士の平田門入門を紹介しているが、それに次ぐ安政4～5年の入門者を見ると、京都の長尾郁三郎や津和野藩の福羽美静がいる。長尾は文久3年2月の足利三代木像梟首事件の実行者、福羽は王政復古の理論家であり、当時の幕府にとって危険な人物であった。西川自身、安政5年の大獄に連坐して「町預り」の身になるが、八幡を脱出して出て京

都へ行き潜み、そして足利三代木像事件に加わったのである。これ以後元治元年9月までの吉輔の動向ははっきりしないが、「町預り」は解けていないにも拘わらず、元治元年5人、慶応元年3人、慶応2年3人の平田門入門を紹介している。慶応3年に「町預り」が解けると、3月に8人、6月と7月に5人ずつ、慶応3年は合計33人という多くを紹介している。続いて慶応4年29人、明治2年15人と多い。西川の場合、ほとんどが近江国内、近江八幡かその周辺各郡の者を紹介しており、慶応4年7月頃から大和国、山城国へ、明治2年は摂津国へと紹介者の範囲は拡大している。自らは慶応4年に皇学所御用掛、明治2年に大学少博士となり、明治3年には宣教少博士として長崎における布教活動に従事したため、以後紹介者は激減する。彼の入門紹介は、親族5人を含めて115人に及んだ⁽¹³⁾。

さて、平田学派の場合も、門人集団の形成は核になる指導者の下に集まった門人相互間のつながりを強めた。平田家の「誓詞帳」は、主たる門人に写されて「門人帳」となり、それはさらに転写されて仲間間に流布さえたのである。代表的なものは、国学者井上頼圀が「誓詞帳」から入門者を筆記して注記を加えた「門人姓名録」(6巻3冊)である。これは、東京無窮会図書館「神習文庫」に所蔵されているが、名著出版刊の『平田篤胤全集』別巻に所収されたため(1981年刊)活用し易くなった。なお、国立国会図書館蔵の「門人姓名録」(写本6巻3冊)は、「頼云」の記載を簡略化した井上頼圀本の写本である。誰の手で筆写されたものかは不明であり、内容的には井上頼圀本の途中にあたる明治2年9月で終わっている。

次いで門人帳として知られるものを示せば、豊橋市立図書館「羽田野文庫」蔵「平田先生授業門人姓名録」(写本3冊)がある。これは、三河吉田の平田門国学者羽田野敬雄が筆写したといわれ

るが、中・下巻の一部は羽田野の筆跡ではない。慶応4年7月15日入門分で終わっているが、別に羽田野自身が紹介して入門した者39名のリストが書かれている。中津川の市岡家所蔵「平田先生門人帳」(写本1冊)は、市岡正蔵殷政が所持していたものだが、これは伊那の国学者北原稻雄の筆写したもので、慶応2年までが書かれている。中津川市に合併したばかりの旧恵那郡福岡町の安保家蔵「授業門人姓名録」(写本1冊)は、同じく慶応2年までの小冊子である。

この他長野県内では2、3点知られている。上伊那郡辰野町小野の倉沢家蔵「平田先生授業門人姓名録」(写本3冊)は、上巻が篤胤生前門人分、中巻が篤胤没後門人のうち元治元年まで、下巻が慶応3年8月朔日までとなっている。倉沢家が匿った平田門人で尊王攘夷派志士角田忠行が筆記したもので、下巻別記分は倉沢家が補記したものである。これは、『新編信濃史料叢書』20巻に所収されている(1978年刊)。また、現在飯田市下伊那教育会館内「市村文庫」蔵に「授業門人姓名録」(写本2冊)がある⁽¹⁴⁾。

他に伊那地方、諏訪地方に未見の門人帳数点があるといわれている。とくに信濃から美濃にかけて、小型版にいたる門人帳が流布していたといっていであらう。これは、交友録として使われたであろうが、門人間の情報交換に役立てられていたのであろう。そこで、これまで検討してきた平田派門人層の広がり背景にして、幕末・維新の激動期に地域において情報がどのように交わされていたかを見ることにしたい。次節で、美濃国中津川を例に、地域情報のアウトラインを描いておきたい。

3 幕末維新期中津川における情報空間について

美濃国恵那郡中津川は、美濃国東端で木曾谷の入口にあたり、中山道の宿場町であると同時に商

業の町でもあった。すでに平田門国学者の概要でもふれたが、篤胤没後門人を輩出したし、その周辺には同じ志、同じ関心をもつ者が多く存在していたと思われる。ここでは、中津川を取り上げて平田門人の形成の背景であり、門人たちの結束を促した情報留、日記、書翰などを素材にして、彼等の情報のあり方を探っておきたい。

(1) 美濃における平田派門人集団の形成

平田門の入門者表に見るように、美濃国は「誓詞帳」で366人、「門人姓名録」などを加えると379人の門人を数える。中部地方では、信濃に次いで入門者数が多かった⁽¹⁵⁾。美濃国の中では、恵那郡150人、以下加茂郡115人、可児郡53人の3郡が多く、厚見郡19人、石津郡18人、土岐郡6人、安八郡5人、不破・武儀郡各人、各務・方県・郡上・本巢・山県郡各1人であった。可児郡の久々利が藩士と在で計31人、加茂郡越原村30人、神土村27人などと集中した入門が見られるが、一番多い恵那郡の大半が中津川36人、苗木60人と、現在の中津川市域に集中していた。

苗木は、藩士の青木景通（稲吉）中心で、彼は明治維新後に神祇事務局、神祇官権判事などを務め、苗木藩大参事となった長男直道と藩内の廃仏毀釈を徹底して神仏分離を進めた人物として知られる。景通は、幕末期は苗木の藩士たちを門人に紹介し、明治元年8月から藩士以外の神主や村方の有力者層も紹介している。明治2年から廃仏毀釈旋風が吹き荒れると、その後また藩中に大量の入門者を出した。一方中津川36人の入門は、安政6年（1859）から明治3年に及んでいるが、その主力は文久3年までの入門者であった。最初が安政6年3月の馬島靖庵（穀生）、ついで間半兵衛（秀矩）、文久2年12月市岡長右衛門（殷政）、文久3年3月肥田九郎兵衛、同年9月勝野七兵衛（正方）などで、この時期までに主要な人物は入門していたのである。

(2) 美濃中津川平田門国学者とその情報収集の資料

中津川の有力平田門国学者が、また当時の地域情報の収集、提供の主役であった。彼らの一応の性格については、かつて筆者は馬籠村大脇信興の「大黒屋日記」の記述から抽出したことがある⁽¹⁶⁾。本稿との関連において、馬島、間、市岡、肥田について簡単に見ておこう。

馬島靖庵は、苗木藩遠山家典医水野家の出で、間分家半兵衛姉と結婚することによって中津川にて本業の眼科医を開業したが、行動範囲が広く、地域医療のかたわら世情の変化をいち早く捉えて中津川に伝えた人物である。安政3年から講無尽の発起に精を出し、まとまった金を手にしている。これは、世情の動きに対応し、実際に行った横浜における生糸売り込みの資金となったものと思われる。その後の攘夷的空気の下で中津川を離れることが多く、慶応4年4月3日に旅先の伊勢にて客死した。馬島の残した書翰は重要な資料である。

間半兵衛は、中津川の有力問屋間奎右衛門分家で、代々酒造業であったが、安政3年の「牛方騒動」で本家が手を引いた問屋業を継いだ。安政6年に山村代官所御勝手世話役につくとともに、同年に馬島と横浜へ出て生糸売り込みを行い、その時に馬島の紹介で平田門に入門手続きをしている。慶応元年から中津川宿年寄役となり、維新後は福島代官山村家と距離を置きつつ動く。半兵衛の母おらいは、馬籠村大黒屋大脇信興の実妹であることから、馬籠とのつながりがつよい。

市岡殷政は、中津川の本陣と問屋を兼ね、後に庄屋にもなった。もともと伊那郡座光寺村庄屋北原家の出身であり、伊那谷との往来・交流がつよい。木曾福島代官山村氏とは歌詠みとして交流がつよく、嘉永期から「風聞留」を残す。文久～元治年間に京都へ出て、尊王攘夷の志士たちと交わった。維新に際して、中津川を代表する村役・宿役人として活躍し、官軍嚮導後は帰村した。10冊の

「風聞留」とともに「土衛遺草」は当時の情報に関する一級資料である。

肥田九郎兵衛は、代々中津川宿の庄屋で問屋も兼ね、屋号を田丸屋といった。俳諧（号馬風）で一家をなす。中津川と馬籠の問屋間、村役人間の和解や無尽の維持に努めた。維新时期に官軍岩倉総督府の嚮導にあたり、戊辰戦争下で木曾谷の農兵騒動には尾張藩との間に立って調停にあたった。官民双方の間に活動できる人物であった。

以上の4人を取り上げたのは、それぞれが『夜明け前』のモデルであるからである。馬島靖庵は宮川寛斎の、間半兵衛は蜂谷香蔵の、市岡殷政は浅見景蔵の、肥田九郎兵衛は小野三郎兵衛の、モデルとなった人物であった。ここでは、それぞれの発信した書翰が保存されてきた、間家・市岡家の書翰と古橋家に残されてきた書翰を素材に、書翰に現れた情報の特徴を概略検討していくことにしたい。

(3) 美濃中津川を中心にみた情報空間

a 近江八幡西川吉輔

西川は、平田門に紹介活動をはじめた安政5年(1858)に、通商条約締結に反対分子として嫌疑をかけられ、「町預り」の身となった。安政大獄に連坐したのである。しかし、これを脱出して、京坂に出て薩摩や長州の志士と交わり、情報を交換した。文久3年2月には、信濃から出てきた女流勤王家松尾多勢子らと、「みそか事」として連絡し合って平田学派による義挙、つまり京都等持院にあった足利三代木像の梟首事件に関わり、捕らえられて「親類預け」となった⁽¹⁷⁾。吉輔自身は、これから慶応3年の王政復古までは地道な活動をし、彦根藩士で医者谷鉄臣らと交わり、彦根藩を勤王方に転換させる上で大きな役割を果たした。王政復古直後に金穀出納御用掛となり、新政に協力した。明治2年に、かぞえ54歳の吉輔は大学少博士に、

明治3年に宣教少博士となり、新政下で平田国学の布教に努めることとなった。

西川吉輔は、幕末期から意欲的に情報を仕入れるとともに、その情報を発信しつつ郷土の人材を平田学に誘ってきた。宮地正人は、「幕末平田国学と政治情報」において、西川の情報源はおおよそ6つあり、そのうちの一つが信濃・美濃の平田門人であるとし、とくに慶応元、2年の中津川の市岡殷政・間秀矩・間一太郎・肥田通光をあげる⁽¹⁸⁾。市岡は情報留と書翰から、間は書翰などから確認できるが、西川の情報は、京都の公家家臣、京坂を奔走した尊攘派・神祇伯白川家、師の平田鉄胤と野々口隆正、矢野玄道ら在京平田派、などとの太いパイプから得ていた。また、京都の書籍商伊勢久(池村邦則・池村邦雄)らとも連携して情報を入手していた。

b 京都伊勢屋久兵衛(伊勢久)

伊勢屋久兵衛は『人名辞典』類には載ったことのない人物であるが、伊勢屋は京都麩屋町御池下にあつて、幕末期には池村邦則、弟池村邦雄が、代々の染物業を継ぎ、また平田家の書籍、服類を販売していた⁽¹⁹⁾。信濃国伊那谷、美濃國中津川に顧客が多く、平田派の中心人物との親交を深め、この販路が平田学の普及と平田派の情報網と重なっていった。文久2年12月、久兵衛邦則は伊那谷から出てきた松尾多勢子の紹介により平田没後門に入門した。京都へ出た松尾多勢子は、伊勢屋池村家を頼り家族同様の交わりをしたが、平田派の決起(足利木像梟首事件)直前に伊勢屋を離れ、借家に移っている⁽²⁰⁾。

伊勢屋から中津川の間家・市岡家への書翰数は、現在判明分でも50通をこえている。現存最初の文久3年8月の書翰は、天誅書や京都三条大橋の助命嘆願書、制札場張紙など緊迫する政情を伝えるものであった。同年11月から翌元治

元年の間家宛のものは、物価、横浜糸相場や仕入糸値、仕切、売払決済など商いに関するものばかりであった。慶応元年から2年半ばにかけての市岡家宛書翰は、加賀へと向かった水戸浪士の動向、薩摩藩と大島三右衛門（西郷吉之助）の動き、太宰府など九州情勢、京都の政情、平田家の動向などを伝えるものであった。これらは、市岡の「風説留」の内容を形づくってきたのである。慶応2年からの間家宛書翰は、慶応3年半ばで途切れるが、御所から松平修理大夫宛云々、一橋出兵停止、徳川中納言殿建白、列侯・諸藩召、市中人気・米相場、兵庫開港御決議など、商相場に関するものは稀で、ほぼ政情関係となっていた。なお、明治4年以降も伊勢屋と中津川諸家との書翰の往復は続いている。

c 三河国設楽郡稲橋村古橋源六郎

三河山間部の豪農古橋源六郎は、文久3年9月に三河吉田の羽田野敬雄の紹介により平田没後門に入門したが、美濃中津川との関係はきわめてつよかった。それは、古橋家が三河稲橋へ移住する享保期以前に中津川にいたこともあるが、その後も関係は続いていた。ここでは、古橋家の書翰集の中から中津川の間・市岡・馬島・肥田4家関係を取り上げてみよう。

間家からの嘉永期までの中身は、家族の身辺の出来事にとどまっていたが、万延元年5月には横浜から送ってきている。その書翰は、洋銀・浜糸値段、糸勘定を知らせている。文久元年11月は、和宮下向にともなう人馬継立て加助郷について、文久2年からは、大原三位江戸下向「天下一新之御改革」への期待、長州方や平田門の動向、糸相場、將軍上洛の風聞、などを伝えている。文久4年1月の書翰では、古橋の平田門入門を喜んでいる。この年11月には水戸浪士の通過のことがあったが、慶応元年まで水戸浪士情報が多く、敦賀行き、加賀藩による処刑

にいたるまで書翰は続いている。慶応2年からは、長州征伐関係、政情の変化を伝えるもの、またこの年から中津川の馬島靖庵が古橋家に身を寄せることになるが、これに関する書翰もある。慶応4年には、御一新にともなう太政官・神祇官、御親兵の動向が伝えられている。

市岡家は、長右衛門殷政の出身である信濃飯田の情報が刻々と入っていたから、とくに元治元年に伊那谷を通行した水戸浪士情報が詳しい。元治元年は筑波拳兵勢の動向、長州戦争関係、糸値段についての情報が、続く慶応元年は、ほぼ水戸浪士の敦賀行きに関する情報で占められている。慶応2年は、助郷軽減歎願、長州戦争石州口・小倉戦争のこと、11月には領主の山村代官の大借金のことなど。慶応3年は長州征伐解兵のこと、9月神祇官再興の話題、水戸浪士崩れ浦山長左衛門（本名木村休之進）の上京、王政復古の件、慶応4年は、両毛二総や東北地方の戦乱の情勢、金札、太政官関係の情報が伝えられている。

馬島は、慶応2年3月、稲橋の古橋家へ参上の件にはじまり、同7月に水戸浪士木村休之進の稲武行きを伝えてくる。馬島自身は中津川に落ち着かず、遍歴を繰り返していたが、同慶応2年に病気になったこと、將軍宣下や水戸藩が正姦に分かれて争い、姦の市川三左衛門らの脱走のこと、長州戦争石洲口の動向などを書き送っている。慶応3年5月には、伊勢の動きの詳細、宇治・山田の情勢、同門矢野玄道、平田家著作板行への中津川からの資金援助のこと、などを伝えている。なお、慶応4年4月13日付馬島秀一からの書翰は、父の死去を知らせるものだった。

古橋家にある肥田九郎兵衛の書翰は、慶応元年9月からのものである。これは、永井主水正の上坂、正義の士の動向、在京佐竹藩士からの情報などを含んでいる。慶応2年7月、長州戦

争では長州が優勢のこと、將軍薨去のこと、また信達一揆・武州一揆のこと、大風雨による米価高、松本辺騒動（木曾一揆）のこと、などいろいろな状況を伝えている。慶応3年12月19日の書翰には、王政復古のことを「正義の者の誠心相頭大愉快の時節到来」と書いている。この後は鳥羽伏見の戦いとその後の政情を伝え、古橋に「早々上京被成」たいと上京を誘っている。肥田自身は、市岡殷政や間秀矩ほど各地を動いたり建白などはしなかったが、中津川宿の庄屋という立場から、国学者間からも支配側からも入ってくる政情をまた平田の同門の士に伝えていたのである。

d 信濃国筑摩郡馬籠村大黒屋大脇信興・島崎正樹

馬籠村も、中津川との間に折に触れて情報のやりとりがあった。その一端は、すでに「年内諸事日記帳（大黒屋日記）」の記事の分析を通じて報告してきた。中津川でも間半兵衛秀矩が、最も馬籠とのつながりが強かったようである。大脇家は、信興の実妹おらいが間家に嫁ぎ秀矩を生んだことから、親戚として強固なつながりがあった。そればかりでなく財政的な面でも文化的な面でも、馬籠からの関わりについては「大黒屋日記」を通して分析したが、大脇家に残された書翰については現在のところどれだけ存在するかも不明であり、中津川からの情報伝達のあり方の分析は残されている。

島崎正樹と中津川との関係は、幕末期には確認できる個別の材料がない。正樹の父吉左衛門は、安政期の「牛方騒動」でも、村役・問屋層としての悩みを共有していたが、中津川と大脇家との強いつながりの一方で、島崎正樹の動きはあまりはっきり出てこない。中津川に残された島崎正樹書翰は、明治5年以後のものである。明治期に関しては別に扱うこととしている

ので、本稿では、島崎正樹関係の明治期の書翰の中身には立ち入らないでおく。

4 おわりに

小説・文学作品の背景となった歴史的世界を描こうとした本稿は、「風説留」や書翰までを素材としたため、十分その内容まで分析が及ばなかった。いわば研究のアウトラインを示すにとどまることになったが、今後一つ一つの書翰の記述内容まで吟味した研究が必要になっていることを、痛感する。

本稿は、美濃ばかりでなく三河を事例に取りあげ、イ) 吉田羽田野敬雄を中心とした地域情報について、ロ) 稲橋村古橋源六郎を中心とした地域情報について、の二点も扱う予定であったが、研究対象が広がってまとめきれなかった。そこで美濃中津川を中心としたものにとどめることとし、吉田・稲橋の事例については、今後の課題としておきたい。

註

- (1) 拙稿「農民日記史料論——『大黒屋日記（年内諸事日記帳）』研究序説——」（『史料館研究紀要』28号 1997）
- (2) 拙稿「農民日記史料論二——『大黒屋日記（年内諸事日記帳）』にみる地名・人名記事について——」（『史料館研究紀要』29号 1998）
- (3) 拙稿「幕末維新期農民日記にみる地域情報——『大黒屋日記』の諸家関係記事について——」（『立正大学文学部論叢』123号 2006）
- (4) 平田学の門人数集計は、平田家「誓詞帳」に拠っている。他に活字化された門人帳には「門人姓名録（気吹舎門人帳）」（東京 無窮会図書館神州文庫蔵）もある。ともに名著出版刊『平田篤胤全集』別巻に所収（1981）。以下の章では、個別の地域、人名の集計には、「誓詞帳」以外にも平田門門人と判明するものを加えて考察することにする。
- (5) とくに断らない限り、市村威人『伊那尊王思想史』（下伊那国民精神作興会 1929）および拙稿

- 「信濃における国学的門人層の形成」(信州大学人文学部『松本平総合研究報告』1983)を参照している。
- (6) 松沢四郎右衛門は、「門人姓名録」(東京 無窮会図書館神州文庫蔵)に出てくる。天保4年12月に、最上常矩の紹介で入門している。
- (7) 拙稿「信濃における国学的門人層の形成」(信州大学人文学部『松本平総合研究報告』1983)参照
- (8) 片桐春一については、市村咸人『前掲書』、松下新市「藩政担当者の国学受容——片桐春一における国学の機能——」(『駿台史学』48号 1979)を参照した。
- (9) 倉沢義随については、「倉沢手記」(『長野県神社百年史』1964)、倉沢道春稿「故翁の面影」(長野県辰野町小野 倉沢秀夫氏蔵)、市村咸人『前掲書』を参照した。
- (10) 岩崎長世・羽田野敬雄・西川吉輔については、平田家「誓詞帳」、無窮会「門人姓名録」、羽田野敬雄筆記「平田先生授業門人姓名録」(豊橋市立図書館蔵)などの門人情報を加えて集計、考察している。
- (11) 岩崎長世の経歴については、市村咸人『前掲書』の記事、北小路健「『夜明け前』登場人物小伝」(『図説「夜明け前」の栞』国書刊行会 1973)を参照した。
- (12) 羽田野敬雄については、田崎哲郎「解説『萬歳書留控』」(羽田野敬雄研究会『幕末三河国神主記録』清文堂出版 1994)も参照した。
- (13) 西川吉輔については、西川太治郎編『西川吉輔』(蒲生郡教育会 1907)、宮地正人「幕末平田国学と政治情報」(中央公論社『日本の近世 18』1994)を参照した。
- (14) 拙稿「気吹舎門人帳について」(『新修平田篤胤全集』月報21 名著出版 1981)
- (15) 美濃国の平田門人については、「誓詞帳」「門人姓名録」両者から得た情報によってまとめた。
- (16) 前掲拙稿「幕末維新时期農民日記にみる地域情報」
- (17) 拙稿「草莽の女性」(女性史総合研究会編『日本女性史 第3巻 近世』東京大学出版会 1982)
- (18) 宮地正人「前掲論文」
- (19) 市村咸人『松尾多勢子』(山村書院 1940)。なおこの本は、大空社の『伝記叢書 59』に所収され、1989年に復刻刊行された。
- (20) アン・ウオルソール『たをやめと明治維新』(ペリかん社 2005)